



片倉もところ記念沙漠文化財団 ニューズレター

2017. 1 No.4



1982年サウジアラビア ナツメヤシを売る遊牧民
(片倉もところ撮影)

● もくじ

- | | | |
|--------|--|--------|
| P 2 | …… 第2回・第3回ゆとろぎ賞授賞式報告 | 郡司みさお |
| P 3-6 | … ゆとろぎ賞授賞式 第2部
受賞者にきく『ゆとろぎ』と『移動文化』をめぐって | |
| P 7 | …… ゆとろぎ賞、サウジでの新聞報道 | 訳：片倉邦雄 |
| P 8-9 | … 万葉ユトロギストとして～沙漠文化と万葉文化 | 小河原正己 |
| P10-11 | … 夢幻の響き・ウッドに恋して | 大城みほ |
| P12-13 | … 片倉もところアルバム 『あるベドウィンのつづやき』より | 河田尚子 |
| P14-15 | … 沙漠の写真館2 / 「ごちそう」 | |
| P16 | …… 出張授業報告 神奈川学園中学校 | 藤本悠子 |
| P17 | …… 講師を派遣します！—出張授業の募集について— | |
| P18-19 | … 第2回 一般活動支援募集のお知らせ | |
| P20 | …… 駐日サウジアラビア大使館・アラブ イスラーム学院表敬訪問
お知らせ | |

ホテルニューオータニガーデンコート、紀尾井フォーラムに笑い声が響き、それまで粛々と進められてきた式典に、明るくたおやかな空気が流れた。2016年助成事業若手研究授与式で、廣田千恵子氏を石山俊理事がユーモアたっぷりに紹介した時のことだ。「数ある選考理由は忘れてしまったが、モンゴル国カザフ人家庭での住み込み調査に始まる一連の研究は、助成に値する」と。

式典は片倉邦雄評議員会議長の挨拶に始まり、冒頭に挙げた助成事業若手研究の授与式、続く一般活動支援授与式では、支援対象に選ばれた東京外国語大学シリア研究会を渡邊三津子理事が紹介し、日本とシリアの学生達の将来への希望が、会場の人々にも伝わった。

第2回・第3回ゆとろぎ賞授賞式と受賞者スピーチは、司会をしていた私自身も聞き入ってしまうほど、実に感慨深いものとなった。第2回受賞者、サウジアラビアから来日したアブドウルラヒーム・ムトゥリク・アルアフマディ氏は、若き日の片倉もとの情熱あふれる研究姿勢が地元研究者に与えた影響を紹介するとともに、現地でも失われつつある沙漠文化や沙漠の民に対する再認識の重要性を訴えた。

第3回受賞者、小長谷有紀氏は、研究対象地域モンゴル高原とアラビアの沙漠との比較、そこに広がる共通した「ゆとろぎ」の精神、さらにはゆとろぎの提唱者であり実践者でもある故片倉もとのこのエピソードについても触れ、会場の共感を得ていた。

さて、休憩をはさんで第2部の『ゆとろぎ』と『移動文化』をめぐってのディスカッションが、二人の受賞者および最首公司顧問、縄田浩志代表理事の間で始まった。ここまで速やかに式典が進行したため、このディスカッションには十分な時間をとることができ、移動文化における地域に

よる相違点と共通性、今後の研究課題など、その内容は多岐に渡り大変興味深いものとなった。また、受賞者アルアフマディ氏に同行したふたりのご子息、新聞記者のアルカシャミー氏に対し、最首氏がアドリブで「普段のアルアフマディ氏」について質問したため、思いがけず彼の素顔が垣間見られ、会場全体がなごやかな笑いに包まれた。

式典の最後に縄田代表理事より財団の活動紹介、続いて原隆一理事より前向きで温かな閉会挨拶がされたが、ゆとろぎを持ちながらも、予定時間通りピッタリと閉会することができたことは、特筆したい。

ところで、今回の授賞式はここまでではない。場所を移動し、同じビルの4階レストラン、ガンシップで行われた昼食会と「月の沙漠コンサート」は、広い空間の中、終始和やかだった。のびのびとしたソプラノの歌声、中東の楽器ウード、そのウードがシルクロードを渡って日本に伝わったとされる琵琶。それらのコラボはまるで、アラビアの沙漠からモンゴル高原、日本を結ぶ1本の道のように繋がり、空間を広がっていった。

この式典の準備には、研究員の古澤氏はじめ事務局主事藤本氏の多大なる努力があり、企画委員、河田理事の協力のもと会場選びから記念盾デザインまで、多岐に渡り力を合わせ手作りしてきたという自負がある。と同時に、財団としてさらに成長するため、ひとつの節目を終えた安堵のみならず、進むべき次の道が見えた大変良い機会になった。

最後に、「素晴らしい式典でもとこ先生らしさを感じた」「会場に流れるウード音楽や、印刷物など趣旨に合っていた」等、多くの方々からお褒めの言葉を頂いたことを付け加えておきたい。

(文：片倉もとこ記念沙漠文化財団理事、
郡司みさお)



ゆとろぎ賞を受賞されたアルアフマディ氏（右から5番目）と小長谷有紀氏（左から4番目）



「チームオリエント」による月の沙漠コンサート

ゆとろぎ賞授賞式 第2部

受賞者にきく：「ゆとろぎ」と「移動文化」をめぐる

授賞式の第2部では「受賞者に聞く『ゆとろぎ』と『移動文化』をめぐる」と題し、受賞者のお二人、聞き手として当財団顧問の最首公司、そして代表理事の縄田浩志によるパネルディスカッションを行いました。その内容の一部を紹介します。

▼縄田：ゆとろぎ賞を受賞されたアブドゥルラヒーム先生と小長谷先生に沙漠文化、移動、“ゆとろぎ”といった観点から、共通点があるのか、それとも違いがあるのか、また今の現代社会の現状を踏まえ、将来どういう展望があるのかを伺います。

最初に移動文化についてお聞きします。沙漠と言えば、やはり遊牧ということを思い浮かべますが、日本には沙漠もなく、遊牧をしている人々は身近にいないので、異文化、違う世界のことになるかと思えます。その中で移動することについてお聞きします。沙漠の人たちは昔から移動に優れた生活をしてきました。現在では沙漠に暮らしていない人々も我々も頻りに飛行機や色々なものを使って移動していますが、その移動文化の素晴らしさを改めて現代、どう考えるのかを伺います。

▼アルアフマディ：沙漠の生活でも都市を訪れ、都市の生活と出会うということがあります。その時、村がまずあり、それを介して都市と沙漠の文化は出会う。昔はラクダやウマなどを使って、沙漠の人々は移動していました。今の人々は都市で環境同士が会って、人間の生活や文化もその影響を受けます。私は都市と沙漠の間に大きな違いがあるとは言えないと思います。都市と沙漠は村、田舎を介して、お互いの間を結ぶ道が開かれているので、出会いがありません。

現在、サウジアラビアではベドウィンの女性がラクダではなく自動車を運転します。一方、都市では定められた制度の下、女性は車を運転できません。ですから、社会的な価値というか、そういった環境がその人間の関係性やその文化に大きな影響を及ぼすと考えます。

▼縄田：最近の沙漠と都市の関係をお話いただきました。なかなか日本では想像できないところがあったかもしれません。オアシスや村があり、沙漠の人たちもそこを通じて、いろいろなネットワークで都市にも繋がり、全体の社会が成り立っているということでした。特に出会いが重要ということは、沙漠に少し住んだ者として、私も非常に重要であると思います。また現代では生活が異なってきており、女性の暮らしにも差が出ているということでした。

ではモンゴルではどういう現在状況なのでしょう。

▼小長谷：出会いは動くことによって生まれるので、やはり最初の動くことの価値がとても強いという点が印象深かったです。やはり我々は動かないでずっと同じ所にいる

こと、そこで積み上げることの価値を重視しがちですが、モンゴル人とお付き合いをして色々なお話をしていると、動くことの価値を非常に高く考えていると思います。例えば日本に長くいた方に姉弟が渡米したので、「日本で何か嫌なことがありましたか？」と聞いたら、「そうじゃない。日本のことはもうわかったから、次に行きます」って。どんどん開拓するという精神です。アメリカへ動いたモンゴル人コミュニティの雑誌のタイトルは『オンザロード』です。そこは終点じゃなく、まだ旅の途上。常に旅の途上という精神で、動くことに価値を見いだしているという点は沙漠であれ、都市であれ、同じではないかと思えます。例えば日本にやって来るモンゴル人力士も故郷にとどまらず、自分の才能を日本へ、場所として動かすことで、花咲かせていらっしゃる。まず自分が動くことの価値をとて大事になさっていると思います。

動くことの価値から出てくるものは、いろんな違いを受け入れる能力が高いことでもあると思います。ずっと同じ所にいたら、そこに慣れ親しむだけですが、動けばどんどん変わるので、動くことに価値があるということは、場所による違いを受け入れる能力が高いということでもあると思います。それは移動文化の特徴じゃないかと。また自分だけが動くのではなく、他人も動くわけですから、家族全体で。例えば私の知り合いのモンゴルの運転手さんのご家族は3人のお子さんがいます。1人はロシア、1人はアメリカ、1人は中国に留学し、それで冗談で4人目が産まれたら日本にも留学させようっていう感じです。結局それが戦略的な能力というか、多様に自分を活かしていく能力にも繋がっていると思います。

▼縄田：やはり出会いの重要性、それは動くことによって生じる。だからこそ違いを受け入れる文化があるという、そういうお話でした。

私自身もアフリカのスーダンの沙漠に住んでいると、同じように家族それぞれが別のなりわいをするようなことがあるように思います。長男は農地を受け継ぎ、次男は放牧の内でもラクダを受け継ぎ、次の子どもはウシ、それからヤギ、ヒツジ、そして最後の息子は都市に出稼ぎに行くみたい。危険を分散すると同時に、いつでもネットワークや家族や社会が成り立っていくような、そういうことに少し共通性があると思いました。

アブドゥルラヒーム先生が、最近この移動文化というの



小長谷有紀氏

は特にアラビア半島の場合、大きな変化があるということを言われましたが、その変化に関して将来どのように地域の人たちが受け止めていくと考えられますか。

▼アルアフマディ：現在、サウジアラビアの沙漠ではたくさんのこと

が変わりつつあります。舗装道路が増え、それにより都市への移動が容易になる中、都市で教育を受けたいと考える人々も増えてきました。サウジアラビアの人々は昔、一つの所に住んでいて、それに飽きたらラクダに家乗せて、他の地域に移って行くというような生活をしていました。現在はそのテントの脇に自動車置いてあります。自動車で水や人を運び、飼料なども都市で買い自動車運んでいます。1つの場所から1つの場所への移動というのは、そういう意味で昔のような沙漠で移動、点々と移転していくことは減っています。一部の村には、水や電気もあり、また天幕にも発電機を持っていたりして、そういう意味でも都市と沙漠の距離は縮まりつつあると思います。未来については、この沙漠の生活の在り様というのが今後も続いていくとはやはり思えません。都市が拡大の一途をたどり、移動が減っています。例えばヒツジやラクダを50km、100kmといった範囲で飼育するというような中で、子ども達は沙漠を離れつつあります。都市部で教育を受け、仕事をしている傾向にあり、今後もそうなると思います。

▼縄田：ではモンゴルではどうでしょうか。

▼小長谷：全く同じです。放牧のための季節的宿営地を移動することはずっと小さくなってきました。それから固定的な家がたくさんあります。放牧のためだけ動けばいいので、生活はずっと固定しているという人もいます。それから国全体で遊牧民の割合もすごく減ってきました。

だけどいい面もあり、道路の舗装化が進んだため、都会とのつながりができました。モンゴルの子ども達の夏休みは3ヶ月もあります。その間、子ども達が田舎に預けられます。その預けられた子どものことを「置物」と呼びますが、そうやって子ども達は、都会の子でも自由に林間学校にいるみたいに、草原の生活、沙漠の生活を一応知ることができます。これもインフラ整備されたおかげです。

もちろん困った面もありますが、別の形で移動の精神というのが受け継がれていくのではないかと思います。遊牧の割合とか、やり方は変わっても、遊牧を止めた人の中にも移動してこそ安らぐとか、絶対リフレッシュには移動が必要とか、自分の人生設計に移動が埋め込まれてないと落ち着かないと

いう、そういう意味での移動文化は、放牧のための移動は減っても受け継いでいけると思います。

▼縄田：移動にはいろんな変化があると思いますが、その精神そのものが、もしかしたら別の形でこれから発展する、継承されるのかもしれないなと思いました。その辺りはちょうど片倉もとこ先生が“ゆとろぎ”という言葉でよんだような、そのもともとの生活にある、素晴らしい移動文化、他の地域の人が持ち得ないけれども、共通しているような、そんなところにも繋がってくるのかもしれないと感じました。

▼最首：アブドゥルラヒーム氏の授賞式挨拶の文章に、片倉もとこさんは沙漠の生活に潜む宝探しに行かれたということが書かれています。例えば、わたしは最近ウイグルの沙漠に生える薬草に関心がありますが、そうした医療的なものでいう宝ということについてお二人に伺いたいです。

▼アルアフマディ：もとこさんは、沙漠で沙漠文化における本質的な価値を見出すことを目指していた、と私は書きました。その翻訳は“宝”となっていました、いわゆる物質的な意味での宝ではありません。沙漠における、あるいは一般的な話としても倫理、習慣、伝統といったものは国によって違いますし、一つの国においても時代と共に変化していく。そういった人間同士の関係や、社会の在り方など、そういった研究を志しておられたと理解しています。そして沙漠における文化の在り様に非常に感銘を受けて、沙漠における社会的価値というものに関心を持ち、それを模索して研究しておられたというのが、もとこさんだと考えています。

▼小長谷：物質的な宝ということだと、やはりそれはサウジアラビアのサハラだけではなく、いろんな沙漠にあると思います。同じかどうかちょっと専門ではないのでわかりませんがゴビにもそういう植物はあります。それに対する民間知、在来知もあります。

アラビアもモンゴルもそれを単に人々の生活の中で使っているというだけでなく、医学体系、学問をきちんと持っています。有名なアラビア医学は在来知が体系化されていて、それも都市も通じてですが、だから沙漠だけではなく、都市との協業と言いましょか、生活者とインテリとの共用というか、そうした体系化を持っていると思います。

モンゴルでも、チベット医学、中国医学、それから西から入ってくるアラビア医学などを排斥せず全部受け止めてモンゴル医学になっています。インド生まれの伝統医学が北上しモンゴルは北方最前線。あんな南で生まれたものを一番北まで持って行く。北まで持って行くにあたっては生まれたまんまではなく、いろいろな出会いを混ぜこぜにして持って行く。医学で見たら、ものすごく大きな広がりユーラシア全体にあると思います。

▼アルアフマディ：サウジアラビアの沙漠でも、民間医療は存在しています。例がずれるかもしれませんが、今のサウジアラビアにある髪の毛を洗うシャンプーについても、「シドゥウ

ル」という、日本語で言うとアカシアの木の匂いのするシャンプーがあります。そもそも昔、沙漠では女性が髪を洗う時にアカシアの木を使っていたので、その香りのするシャンプーが現在でも使われています。

さまざまな植物が医療などに用いられてきた伝統があります。例えばイブン・シーナーの医学書を見れば、現在民間医療で使われる、あらゆる種類の植物が当時から使われていたと言及されており、医者たちの努力の積み重ねを経て、発展した形で現在まで使われています。例えば骨折や頭痛、発熱、そういうものについては病院へわざわざ行かず、植物由来の薬で治すことが今でも行われています。

▼縄田：今話題に出ましたアカシアの木の蜜からできたハチミツを、僕はサウジアラビアとイエメンの国境近くの山で食べたことありますが、非常に美味しく、かつアラブの人たちがハチミツを大事にして、食べて、楽しむという文化、そういう健康でもあるということと繋がっているのかなと僕自身感じたことがあります。

今度は文学の点でお聞きします。アブドゥルラヒーム先生はイスラム以前の時代から、アラブの詩人たちが非常に豊かな想像力、芸術性を持った詩、文芸を残されていると書かれています。ご自身も詩人であると同時に文学についての意識が高く、さらに後進をどう育てるのかということに非常に努力されてきたとお聞きしました。アラビア語の文芸が沙漠や移動という観点でどういう価値を持つのか教えてください。

▼アルアフマディ：沙漠の人、沙漠の民は運がいいです。なぜならば詩的な雰囲気の中で暮らすことができるからです。星、月、雲、そして大地が冬から春にかけて黄色から緑へ、そしていろんな花の色へと移り変わっていく様子。そういうことを楽しむことができるからです。アラブの詩人たち、古い詩人たちはこれを描写しました。そして沙漠の民もこれを楽しんできました。

都市の住民も折に触れて沙漠に出て、この美しい彩りを楽しみます。けれども、新しい世代は残念なことに、なかなかそういったことに触れることができない。沙漠との間を繋ぐ架け橋がちょっと欠けていると思います。

沙漠の夜は素晴らしいです。けれども新しい世代のサウジ人はなかなか空のドームを見て楽しむことができない。都市の近くの沙漠地域では、やはり明かりが空にうつってしまうので、なかなか本当の空を楽しむことができません。私たちは小さい頃、ひとつひとつの星の名前を知っていました。星座もふたご座であるとかいろいろな名前や空のことを知っていました。

▼縄田：確かに沙漠は昼暑く、なかなか頭も働かない時、だんだん涼しくなって、夕方になるとそれまで溜まった頭がパッと働き出して、すごく感覚が鋭敏になるようなことを私も沙漠に暮らしていた時、思いました。沙漠は過酷だけれども、非常に贅沢で貴重な夕方から夜にかけての時間を、皆さ

んで集まっている話したり、詩を読んだり、星を眺めたり、すごく素晴らしい時間を共有したことを思い出しました。

ところで、小長谷先生もモンゴルでたくさんの口頭伝承を集

められていると思いますが、そのお話をお伺いします。

▼小長谷：アブドゥルラヒーム先生が授賞式のパンフレットに書かれているお言葉と私のものと比べると、私の方はもう文学的な才能がまったくなく、恥ずかしく思いました。最初の3行の詩的な響きが全然違います。私の文章もアラビア語に翻訳していただいたおかげで、少しはこれが詩的になればいいのにと望みましたが、それはもともと悪いので仕方ないかもしれません。ただ、それは私の個人の問題であり、やはり今おっしゃったように風土が与える詩的な環境、風土が持つ魅力がやはりユーラシアの乾燥地域の一番東側に来てもあります。

私はずっとフィールドワークをしていて思ったのは、レストランになぜ風景画を掲げるかということです。レストランに行くと、よく風景画がありますね。あれは本来、人はほんとは大自然の中で、こんな自然の中で食べていたことを思い出すためじゃないかなと思うぐらいに、やっぱりフィールドワークがいろんなイメージを与えてくれる力というのは大きいと思います。

特にそれが言葉に宿っているのは、やはり移動している人たちの移動文化の一つだと思います。口頭伝承の力です。ほんとはごく普通の人々が成功すると、自分の詩集を刊行されて「これが僕の本だ」と名刺代わりにくださいます。それは遊牧を捨てて、単なる小さなビジネスマンになったとしても、そういう移動文化とセットであるような伝承文化、口頭伝承文化が形を変えて息づいているのではないかと思います。

▼最首：今日の授賞式にはアブドゥルラヒーム氏のご友人と二人のご息も来られています。上の息子さんは外交官、下の息子さんは銀行員、またご長女は国会議員、一番若い妹は生物医学を専攻されているそうです。サウジアラビアの青年というと、昨今ではアルカイダのような極端な方に行く若者を我々は連想しますが、優秀なお子さんを育てたその子育て法、サウジ式子育て法というのが何かあるのでしょうか。

▼アルアフマディ：おかげさまで家族はいつも絆に結ばれていて、お互いに助け合ってきましたので、過激な行動に走るようなことは全然ありません。おかげさまでそういう暮らし



アブドゥルラヒーム・ムトゥリク
・アルアフマディ氏

ゆとろぎ賞 第2部 受賞者にきく：「ゆとろぎ」と「移動文化」をめぐる

をしています。もちろん、これはまずは神のおかげですし、そして彼らの母親も非常に子どもたちを可愛がって、きちんと育ててきました。兄は弟を可愛がり、弟は兄を助けてというように育ってきました。ただ今回、東京に来て、息子たちは私よりも東京に惹きつけられたようで。決まった時間だけ助けてくれたら、あとはどこか行ってしまい、夜はどこにいるのかわからない。電話をかけても通じない。このことについて邦雄さんに、どうしたらいいか文句を言いたいです。

▼縄田：非常に和やかでいい家族のお話、ありがとうございます。私も半年前アブドゥルラヒーム先生のお家にお邪魔する機会がありました。非常に温かく、和やかで、日本人とあるところ共通するような感じがしました。

最後に「ゆとろぎ」についてお聞きしたいと思います。「ゆ

いますが、努力して乗り越えました。そしてついにサウジの女性たちとも友人になりました。サウジの男性たちにも歓迎され、学びたいことを学び取っていくことができた訳です。「ラーハ」は、その疲れから解放されたというよりも、何事かを成し遂げたことで心の安らぎ、誰も傷つけることなく、みんなのために何事かをなし得たという、そういう時に感じるものだと考えます。私がサウジの学者たちに、ラーハ賞(ゆとろぎ賞)が設けられたということをお話すと、彼らはびっくりしました。それはすごく斬新だから。新しい賞でこれは非常に評価に値するたぐいまれな賞だというふうに思います。

▼縄田：ありがとうございます。アラビア語の「ラーハ」の理解が非常に深まり、また新たな気持ちで「ゆとろぎ」という言葉を使えるかなと思います。小長谷先生はどのように思



ディスカッションの様子

とろぎ」という言葉はアラビア語の「ラーハ」という言葉に触発されて、片倉もとこ先生が作られた日本語の造語です。その「ラーハ」は「ゆとろぎ」と100%同じ意味ではありませんが、この機会にアラビア語の「ラーハ」の意味、またアブドゥルラヒーム先生が片倉もとこ先生と付き合う中で、おそらくもとこ先生はアブドゥルラヒーム先生ご家族の様子を見ながら、中に一緒に入りながら感じたこと、観察したことから出てきたと思います。その辺を是非この機会に教えていただければと思います。

▼アルアフマディ：アラビア語の「ラーハ」という言葉について言うと、日本語への翻訳ということもあるでしょうが、人が何事かを成し遂げた時に感じるもの、というのを「ラーハ」であると私は捉えています。すごく疲れていて、それから解放されて楽になったとか、そういった意味での「ラーハ」というよりも、何かを成し遂げた時に覚えるものではないかと思っています。

もとこさんはワーディ・ファーティマで、日本と違う環境、自然や宗教も違う村、しかも女性として、その村の社会に入っていくなか、日本と違う環境で、非常に困難に直面したと思

われましたか。

▼小長谷：先程来ずっと言葉の中に「おかげさまで」という言葉がたくさん出ていて、なんとなく、この「おかげさまで」かなと思いました。今改めて、ストンと心に落ちました。「ゆとろぎ」をそういうふうに理解して、この新しい日本語が広まれば、まだ辞書には登録されていませんが、みんなが使えば言葉は増えていきますので、日本語を増やしたら。もともと「おかげさまで」の精神は我々も持っているので、受け入れられる言葉ではないでしょうか。そういう意味でいただいた賞はほんとにありがたいなど。「おかげさま」です。ありがとうございました。

▼今日は、ゆとろぎ賞を受賞されましたアブドゥルラヒーム先生、小長谷先生、そしてフロアの皆さんもお付き合い頂き、どうもありがとうございました。

今回の授賞式後、サウジアラビアにて新聞報道された記事の一部を大意要約して紹介します。

■アル・マディーナ紙 2016年11月28日

<http://www.al-madina.com/node/710287>

「アブドゥルラヒームと沙漠文化賞」

アーエド・アルラッダーディ

ゆとろぎ賞は、沙漠の国で授賞されたものでなく、海に囲まれた沙漠のない島国日本でとり行われ、そしてその日本は沙漠地域からはおよそ遠い極東の国であり、この賞はその昔ジェッダの大使館に赴任した夫に伴ってサウジ王国に来訪した一人の日本人女性、片倉もとこ女史によって設立された財団が与えたものである。

アブドゥルラヒーム・ビン・ムトゥリク・アルアフマディ氏はこれまでの出版編集活動や研究者に対する援助が高く評価され、財団より同賞を授与された。それは、単に運がよかったのではなく、おそらくこれだけの知識の灯火をひけらかそうとの欲も全くない謙虚なこの人物が、我が国の誇りとすべき一人の文化人として、沙漠文化研究者に対する助力と彼自身の努力と学究を重ねてきたという実績に対し、高く称揚されたということである。

■アル・ジャジーラ紙 2016年11月26日

<http://www.al-jazirah.com/2016/20161126/cm43.htm>

「知られざるニュース 日本の沙漠文化賞の栄光は、

アブドゥルラヒーム・アルアフマディの上に輝く」ムハンマド・アブドゥルラザーク・アルカシャアミー

わが友人アブドゥルラヒーム・アルアフマディ氏に同行して、私は今回初めて日本を訪問することができた。同氏は、片倉もとこ記念沙漠文化財団が2年前から開始した「ラーハ（ゆとろぎ）」賞を授与されることになった。同じく式典において、モンゴルの遊牧民の移動と定着化の過程を調査し、博士論文を完成させた小長谷有紀教授にも、2016年度同賞が授与された。

アルアフマディ氏および二人の息子に同行し、行動を共にした期間を通じて、私は新鮮な驚きを感じた。我々は一生のなかで最も美しい1週間を過ごすことができ、その間我々の詩を尊敬し評価する人びとに直接お会いし共感し共に過ごした。アル・マディーナ紙の1970年（1390年4月27日ヒジュラ暦）金曜版第1904号に、次のような記事が掲載されているのを見つけた。

『ワーディ・ファアティマに日本の女性：サウジ王国の経済社会生活について博士論文を準備』<<彼女は遠い極東からやってきた。美しい技術と工業力をもった先進国からきたのだ。夫である日本大使館一等書記官片倉邦雄に随伴してきたが、片倉もとこ氏は外交官夫人の座だけでは満足せず、立場上日出ずる国にふさわしくふるまうことが求められるところだが、結晶のような知性をもって科学実験を試み、数か月後に東京大学に博士号取得のため論文を作成・提出する目的で現地調査の場を真剣に探そうと決意を固めたのである。手始めにワーディ・ファアティマをフィールドワークの場として選び、遊牧生活の中に身を縮めて謙虚に入っていった。テントや毛織の住居に住み、ワーディの女性の服装をまとい、孤独、ホームシックの感情を抑え、不便なみちのりをあえて我慢して、ワーディ地域の社会経済シ

ステムについての調査結果を論文にまとめようと努めた。私は彼女にご自宅でお会いした。あちこちの遺跡の発掘品や展示物が飾られ、我々にいわせれば小博物館という雰囲気、日没後のおもてなしは快適なものであった。彼女は滞在中ワーディと日本の間の長旅を続けることになったが、航空切符を支払ったことは別にして、旅行の魅力を満喫したものだ。彼女は知らなかったことをたくさん学ぶこととなった。なかでも、知識とは成り行きに任せておけば生まれてくるものではなく、人の心をつかみたいとの願望とその方法をもってすべてを作り出すか、あるいはまったく結果を生まないかであることを彼女は知ったのである。>>

■アル・リヤド紙 2016年11月17日（ヒジュラ暦1438年）

<http://www.alriyadh.com/1548369>

「民間文芸家の動向 沙漠文化賞受賞の旅」

アブドゥルラヒーム・アルアフマディ

沙漠文化というものを慶祝する最初の人々が日本人だということを一休誰か信じるだろうか。いったい都市生活をしている人のうち誰が、沙漠文化に驚きをもって接し、また創造の秘密やその他の知識を探求しようとするだろうか。

片倉もとこ氏はわが国での短い滞在期間に生前フィールドワークを重ね、その後の変化をフォロー、文化人類学界との絆を深める努力を傾注した。そして遺言によって片倉もとこ記念沙漠文化財団が設立され、沙漠文化研究に功績のあった人物を毎年表彰することになっている。

すでに世界の中心的な学界は片倉教授の研究に注目し、文化人類学上の重要な参考文献として位置づけている。これはひいては、社会生活の価値、その共通性、宇宙の創生、そして将来への方向性にもつながり、一般に国家の存在と市民の社会開発への参加にも関係することである。なぜならば、われわれみな究極知に好奇心を持つ世界の一部であり、また本来学問研究は中立的なものであって、その目標は実際の効用には程遠いものだからである。そしてそれは（アカデミックな研究）基礎研究と学問的方法論に従うもので、科学的目標以外の方向に向うものではない。

沙漠文化へご関心をいただいた日本の友人に心からの感謝をささげる。かれらはアラビア沙漠とモンゴルの沙漠を比較し、彼らの好奇心はその他の地域の沙漠文化へと向かうようになっているからだ。まことに日本人の雅量の大きさ、客人へのもてなし、そして彼らの高潔さは以前にも感じてはいたが、今回も同様の感動を覚え、きっとそれは日本、この清潔な国を訪れる外国人が一様に感じ取るだろうと思った。

最後に、駐日大使およびアラブ イスラーム学院長ならびに大使館、アラブ イスラーム学院職員一同よりいただいたご歓待に、心からの感謝をささげる。そして最近、沙漠と都市が接近しつつあるという現象は、沙漠の犠牲においてイスラーム化現象が進んでいることに関連しているが、まばゆい都市の光が突然現れる前に沙漠文化は書き留められ、感じ取られてきたのだということを明記したい。

万葉ユトログリストとして ～沙漠文化と万葉文化

小河原正己

(片倉もとこ記念沙漠文化財団評議員・プロデューサー)

私の名刺には、プロデューサーと並んで、もう一つ肩書が書かれている。それは、「万葉ユトログリスト」。この奇妙な肩書に気がついた人は必ず、「これ、なんですか?」と聞いてくる。そこで、私はおもむろに、片倉もとこ先生のお話を披歴することになる。

「万葉集」と「ゆとろぎ」という2つの異質の文言を組み合わせたのは、もとこ先生との2つの接点を結びつけたものに他ならない。

先生との最初の接点は、ちょうど30年前のこと。当時私は、NHKで放送のNHK特集「海のシルクロード」シリーズのプロデューサーを担当していた。遙か西安からローマに至った取材班が、帰路は海のシルクロードをたどって西安に戻ろうという企画だった。そして、その出発点が、シリアの地中海沖に沈んでいたアンフォラの壺の発掘だった。その発掘調査と番組取材の交渉のため、初めてシリアに入ったのが、昭和61年のことだった。シリアでは、首都ダマスカスの他に、アレppoが取材拠点の1つとなった。アレppoはシリアでも最古の都市で、アレppo城を中心に歴史ある街並みが美しい街だった。それが今や、テレビで廃墟のように変り果てた光景を見、新聞に「アレppoは地獄」などという見出しを目にするたびに息を飲む。



「海のシルクロード」
シリア沖のアンフォラ

シリアでの交渉は、極めてハードで、相手方は強硬だった。しかし、交渉が終わると、人々はとても優しく、友好的で、私たちを精一杯もてなしてくれた。沙漠に設けられた天幕に招待され、子羊の丸焼き料理をふるまわれたりもした。その帰り道に、沙漠で見た夜空は圧巻だった。空全面に星がばらまかれ、中空には三日月が浮いていた。

もとこ先生にお世話になったのは、この番組の取材の中だった。「海のシルクロード」がテーマだから、沙漠についてご教示いただくことは少なかったが、ちょうどその時期、もとこ先生は、沙漠の民ベドウィンが古来海に乗り出

していた、という仮説を立て研究を進めていた。そこで、私たちは先生に、NHK出版から発行する取材記の巻末特集として「海のベドウィン」の執筆を依頼した。NHK出版からは、その数年前、NHKブックスとして、名著『アラビア・ノート』を出してもらっていたこともあり、話は早く、すぐに快諾いただいた。先生は早速再調査に入れ、新たなアラビア語文献を発掘し、文字通り学術的スクープをされた。先生とは、それ以来のお付き合いとなった。

もう1つの接点は、平成20年のことだった。私は、NHK「日めくり万葉集」というミニ番組シリーズのプロデューサーを務めていた。当番組に、日本学の権威、梅原猛先生に出演いただくことになり、先生からインタビューの場所に京都の日文研が指定された。ちょうど、もとこ先生が、その所長をされている時期だった。インタビュー当日は残念ながらすれ違いで、お目にかかることができなかったが、帰京してすぐ、先生にお礼の電話を入れた。その電話を切る際、一言、先生にお尋ねした。「先生、万葉集に関心ありませんか?」。

今考えると、先生に対して、誠に失礼な質問だった。先生の答えは、「自分から言うのも気恥ずかしいけど、私、万葉集とは縁が深く、それに、とても詳しいのよ」。20年以上も親しくお付き合いさせていただきながら、迂闊だった。先生が歌を詠まれることは知っていたが、奈良は春日山の麓に生まれ育ち、明日香小学校に通い、その時から絵本代わりに子供向けの『万葉集物語』を繰り返し読んでいたことなど、全く知らなかったのである。取材不足をお詫びすると、先生は、「今まで誰にも話したことがないから」と言って、にっこり微笑まれた。その電話ですぐ出演交渉して、「日めくり万葉集」に3本出させていただいたことは言うまでもない。

その後、改めて『アラビア・ノート』を取り出してみた。先生は、こう記していた。「アラブでは、まず何をおいても詩…詩のかけ合い、手土産も詩、生活のすみずみまで詩が入っている」という。まさに、万葉の世界そのものなのだ。先生ご自身も、沙漠でのフィールドワークの中で、万葉秀歌を本歌取りした歌を詠んでいる。

万葉ユトロギストとして ～沙漠文化と万葉文化

その内の1首は、東京に残してきた、当時まだ2～3歳の2人の子どもを思って詠んだ歌。

「旅にして 吾子恋しきに アラビアの
青の飛行機 東に飛び行く」

万葉集の元の歌は、旅の歌人高市黒人の羈旅歌。

「旅にして もの恋しきに 山下(やまもと)の
赤(あけ)のそほ舟(ぶね) 沖に漕ぐ見ゆ」

黒人が、「ついさっきまで岸の山裾にいた赤の小舟が、もう沖の方に行ってしまった、都にいる家族のもとに帰るんだろう」と詠んだ歌で、舟を飛行機に代えて、見事に本歌取りしている。ただし、先生は、黒人の歌の形を取っただけではない。というのは、もともと先生が、私に一言尋ねたのだ。「万葉の時代、赤は魔除けの色でした。アラビアでは、魔除けの色は何色だと思う？」。

私は、首を傾げるばかりだったが、先生の答えは、「赤ではなく、青なのよ」。

その後調べてみると、確かにサウジアラビア航空の飛行機は青がイメージカラーとなっていたが、そのように話す以上は、飛行機の色よりむしろ、魔除けの青を詠うことによって、東京に残してきた家族の無事を祈ったのだろう。先生は、黒人の思いまで本歌取りしていたのである。

また、『アラビア・ノート』には、こんなエピソードも続いている。沙漠の中にある雑貨店に行った時、財布を忘れた……店の人は、「いいよ、ここに詩を書いておいてくれれば」。そこで、「下手な歌」を、日本語で書いたら、店主は、縦に書く日本語に見とれて、大満足だったという。詩が借用書代わりになるという沙漠文化には「見とれる」

ばかりだが、先生が、この借用書に書いた歌が「青の飛行機」の歌だったのだろうか。

ところで、先生の記述を、今回のゆとろぎ賞授賞式の中で、改めて確認することになった。受賞者のアルアフマディさんの言葉が心に残っている。「沙漠の民は運がいい。詩的な雰囲気なかで暮らすことができるから。星、月、雲、大地など等……アラブの詩人たちは、これを描写した」。すごい言葉だ、と思う。アルアフマディさんご自身が詩人でもあるというのが、歌人であるもともと先生と、さぞかしお互い魂が触れあったことだろう。

「日めくり万葉集」の放送は終わったけれど、現在「万葉集宣伝係」として活動している。そして、このたび財団の評議員の就任に当たり、天国のもともと先生からユトロギストの使用許可(?)をいただいた。そこで、先生の「ゆとろぎ」というような造語の冴えはないけれども、「万葉集」と「ゆとろぎ」の2つを合わせて、「万葉ユトロギスト」を自称させていただいている次第である。

最後に、沙漠の星、月、雲などを詠んだアラブの詩人たちに応えて、万葉集から、柿本人麻呂歌集の秀歌1首を改めて紹介したい。

「天の海に 雲の波立ち 月の船
星の林に 漕ぎ隠る見ゆ」

(文:片倉もともと記念沙漠文化財団評議員・プロデューサー、
小河原正己)



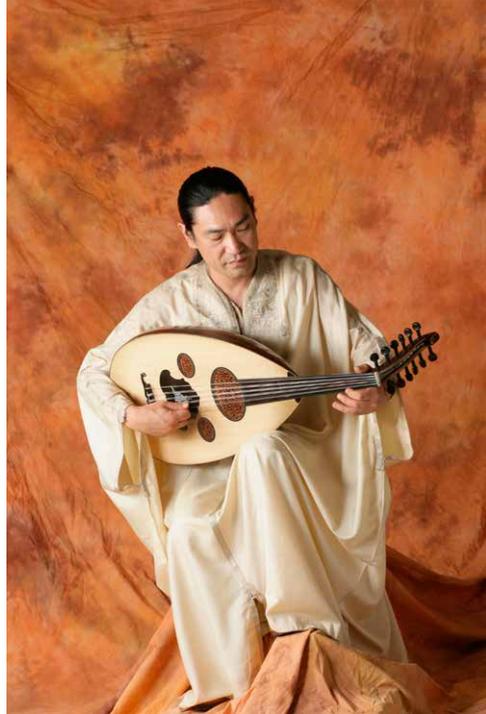
「日めくり万葉集」出演の片倉もともと先生(平成21年9月放送)

ウッド奏者、常味裕司。初めて出会った日の衝撃を今も忘れない。直接体に染み込んでくる音、絶妙なニュアンスで心を溶かす音は、あとでわかるのだが、微分音というもの。心を真っ白にして耳をそばだてれば見えてくる自然の美しいアラベスク。長い時間が育んだであろう曲の完成度。私は一気に恋に落ちた。

常味氏はアジアの名手と言われる実力者。ウッドの技を日本に伝えたパイオニアであり、ウッドの王道を行く孤高の第一人者でもある。

ササン朝ペルシアに始まったバルバトという楽器を起源とするウッド。木の表面版が画期的なウッドが成立したのは今からおよそ 1000 年前ということである。ウッドとは「木片」を意味し、英語の wood の語源ともなった。アラブ世界を中心に人々に愛され続けてきたこの楽器はアラブの楽器の女王と称されている。

アラブ音楽の奥は深く、まず挙げられる特徴は微分音である。西洋音楽で全音と呼ばれる、いわゆるドとレの間にアラブ音楽では9つの音が存在する。奏者はこの微分音を操り、無数にあるマカーム（音階：この音階の意味も西洋音楽とは違う）の理論を理解した上で、それらをセンス良く組み合わせつつ即興を交えて美しく摩訶不思議な音のアラベスクを紡いでいく。楽譜にならない技を弟子は師匠か



ウッド奏者、常味裕司氏

ら直接頂く。常味の技は 10 年にわたるチュニジア修行時代にチュニジアの国宝、故アリ・スリティー氏より受け継がれたものだ。



「駱駝の背中に揺られながら」
エジプトにて常味裕司撮影

夢幻の響き・ウッドに恋して

またアラブ音楽はアラブ文学と密接に繋がっている結果、9拍子、10拍子、12拍子など詩に合わせた雄大な拍子が存在する。西洋音楽では「変拍子」とひと括りにするが、アラブ音楽から見ると、詩をブツブツと3拍子、4拍子に区切る方が「変拍子」ということになりかねない。音楽はまず歌詞ありきの姿勢は今も変わらない。

このウッドがシルクロードを東方、西方に渡り、それぞれ琵琶、リュートとなったという説が有力だ。和音も奏でるリュートと比べ、中国を経て日本に渡ったとされる琵琶はウッドと近親度が高い。二つの小さな共鳴穴が太陽と月を表すこともウッドと同じ。古来より言葉を大切に民族、私たち日本人が育んだ琵琶は語りものの伴奏として、独特の「間」の美しさを持つ。力強い音楽は「微分音」的であり、調を選びながら人間が楽器に寄り添っている。その匙加減が非常に人間的で魅力的。韻を踏むなどの美意識に共通した文学的なものへの精神性も日本とアラブが近く感じられる所以だ。

ササン朝ペルシア、つまりは西アジアを起源とするウッド。同じアジアの楽器だったのだ。ウッドの音楽に血が騒ぐのも自分がアジア人であることの証なのか。驚くことに平安時代に流行った越天楽今様にもアラブ音楽そっくりの音階が存在し、日本の民謡にもそっくりのリズムが使われていたりする。悠久の時を刻んだウッドの夢幻の響きは、私たちの心に懐かしく響き、シルクロードで繋がれた確かな縁を感じさせる。

自らのアイデンティティをも探る音楽の旅はまだ始まったばかりである。

(文：ソプラノ歌手、大城みほ)



折れ曲がったネックとボディの涙型がお揃い琵琶とウッド

～コンサートのおしらせ～

■シルクロードコンサート■

2017年6月10日(土)午後2時開演

近江楽堂：東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティ3F、tel 03-5353-6937

京王新線初台駅東口出口から徒歩3分

出演／常味裕司(ウッド) & 大城みほ(ソプラノ)

■第6回月の沙漠コンサート■

2017年10月1日(日)午後2時開演

自由学園明日館：東京都豊島区西池袋2-31-3、tel03(3971)7535

JR池袋駅メトロポリタン口より徒歩5分/JR目白駅より徒歩7分

出演／常味裕司(ウッド)、田原順子(琵琶)、

櫻田亨(リュート)、柴田杏里(ギター)、

大城みほ(ソプラノ)

*月の沙漠コンサート <http://www.tsukinosabaku.net/>

片倉もところ アルバム

『あるベドウィンのつづやき』*より

河田尚子

「さようなら、私は行きます、私は、去りますよ」

主人公のベドウィンが生まれた時、雇われ牧夫アブドゥッラーはこのように彼の父親に言ったという。おめでとうございます、男の子が生まれたのだから、もう雇いの牧夫はいりませんね、という代わりに、このような表現で祝福したのだ。

こんな出だしで始まる『あるベドウィンのつづやき』は、「アラビアの荒野に生をうけたある遊牧民が、長いつき合ひの中で、つづやくように、ぼつりぼつりと語ってくれた話」を抜粋したものである。主人公は生粋のベドウィンとして生まれ、厳しい自然の中でも、その一員として確固とした生活を築き上げていた。ラクダの頭一頭に名前をつけ、ラクダについての詩を朗唱する。牧羊犬ならぬ、誘導ヒツジのワリダーンは、頼りになる可愛いやつ。1日5回の礼拝のリズムは、牧畜のリズムによく合っている。ラマダーン月の断食の行が終われば、家族みんなで特別の料理に舌鼓をうつ。

もところ先生がこのベドウィンと最初に出会ったのは1968年。普通であれば、父や祖父とほとんど変わらない遊牧民の生活を送って生を終えるはずだった主人公は、このころにアラビア半島をおおった急速な近代化の波に投げ込まれ、翻弄されていく。やがて彼は遊牧生活を離れ、アメリカ系の石油会社に勤めるようになる。下着をはき、長い髪を短く切り、テント生活から冷房のきいたコンクリートの家に住むようになる。生年月日をたびたび聞かれることに首をかしげ、コーヒーを飲むのにお金を取られることに驚き、アメリカ人とのつき合い方にとまどいつつも、初めのうちは生活の変化を楽しむ余裕があった。しかしやがて礼拝もしなくなり、体に不調をおぼえ、精神的にいらいらするようになる。

会社をやめて家族のもとに戻ったが、沙漠にも物質文化が押し寄せている。家族の欲しがるものを買うためにラクダを手放してトラックで遊牧をするようになる。しかし、ラクダのいない遊牧生活はもはやかつてのような精神的な満足を得られるものではなくなっていた。清浄だった沙漠には、プラスチックなどのゴミが散乱するようになってしまった。結局、彼はトラックの運転手として再び家族を離れ、町で働き始める。

ある時、故障した車に乗っていた外国人を助けたことがきっかけで、妻子がありながら、フィリピン人の女性と知り合った主人公は、「これは、私たちのやり方ではない」と思いつつ、ずるずると女性との関係を続けてしまう。クウェートへの沙漠道路をトラックで疾走していると、「おまえに何が起こったのだ」「おまえは、もう私たちに属していない人間だよ」と嘆く両親の声が耳にかぶさってくる。

そんな独白を最後に、主人公はあっけなく交通事故で亡くなってしまふ。この男性のライフヒストリーに、一行ごとに註をつけたいと思いつつ、結局もところ先生はいっさいつけることをやめた。等身大の人間を平易に語るという企画のためでもあるが、身元がわかって家族に迷惑がかかってはならないという配慮もあった。

この文章がおさめられている『イスラーム世界の人びと牧畜民』の内扉には、荒野にむらがるヒツジの群れを背景に、ベドウィンの男性の姿が映った写真が用いられている。もちろん主人公の写真ではない。それどころか、サウジアラビアでとられた写真ですらない。

実は、その写真を紹介したいと思って、財団の古澤さんに探していただいたが、なかなか見つからなかった。1982年のシリア調査の際に写したものらしいというところまではわかったのだが、写真そのものはとうとう出てこ

片倉もとこ
所蔵，撮影の写真と
それにまつわる思い出を
紹介します



1982年 シリア 片倉もとこ撮影

なかったのだ。ただ、同じ男性が荒野で遊牧するさまが写った一連の写真は見つかった。

どうしようかと思ったが、結局、その男性の後ろ姿が写っている写真を紹介することにした。本文のキャプションにある、「果てしなく続く荒野で、ヒツジを追いながら、いろいろなことを考えたもんだった」という男の言葉は、この写真の男性にも共通するものだろうと思ったからだ。物思いにふけるような男性の横顔を見ていただけないのは残

念だが、むしろ顔が写っていないほうがいいのかもかもしれない。顔を見れば、近代化の波に押し流された「あるベドウィン」のつらい人生と、この男性がオーバーラップし過ぎてしまうかもしれないから。

*片倉もとこ「あるベドウィンのつづやき」1-33、『イスラム世界の人びと—3 牧畜民』永田雄三編／松原正毅編、東洋経済新報社、1984年



- 1** サウジアラビア、ジェッダ近郊の店
 「海の幸のごちそう」ジェッダには大きなフィッシュスークがあり、紅海をはじめ近海で採れる魚が売られている。ロブスターやカニも事前注文すれば料理してくれる。
 (郡司みさお)

沙漠の写

テーマは「こ

世界にひろがる

さまざまなコト

写真で紹介しま



- 3** モロッコ、ティネリール
 ベルベル人のおじさんが
 作ってくれたタジン。
 (藤本悠子)



- 4** カザフスタン
 中央アジアの
 を意味し、も
 い麺に、ヒツ
 客時のおもて

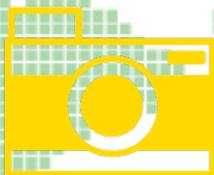


- 3** モロッコ、フェズ
 宮廷料理「バスティラ」。鳩肉とスパイス、アーモンドなどを混ぜたものをパイ生地で包み揚げ、甘いソースをかけて粉砂糖をふりかける。
 (藤本悠子)

写真館 2 「ごちそう」

沙漠の

を
す



2 モンゴル国、トゥブ県バヤンウンジュール村
モンゴルの夏のごちそう。アイラグとよばれる馬乳酒。
馬乳酒を囲みながら指遊びに興じる。(児玉香菜子)



共和国、アルマトゥ州
のおもてなし料理「ベシュバルマク」。「5本の指」
ともとは5本の指を使って食べていた。平た
りなウマの肉を乗せたもので、お祝い事や来
賓をおもてなし料理として饗される。(渡邊三津子)



5 中国、新疆ウイグル自治区ホータン
ひらべったい形のいちじく。黄色い皮は柔らかいのでその
まま食べられる。8月ぐらいから、たらいにきれいに盛ら
れたいちじくが、町のあちこちで売られるようになる。
(古澤文)

2016年11月11日（金）、神奈川県横浜市の神奈川学園中学校(中高一貫の女子校)において、1日研修プログラム「多文化共生～互いに承認しあう社会の形成のために」が実施され、当財団の河田尚子理事が講師として招かれた。

このプログラムは、同中学校3年生が2017年3月にカナダへホームステイを予定しているため、同国の掲げる多文化主義やホストファミリーの文化的背景について考える事前学習の一環として企画されたものである。研修先は、いちよう団地・中華街等多様であり、その1つとしてイスラーム文化が挙げられ、学生50名が河田理事の講演会および東京ジャーミィへの見学に参加した。

「イスラーム教徒の生活文化」と題し、河田理事はまず日本が世界でも例外的にムスリムが少ない国であると説明し、イスラームの挨拶「アッサラームアライクム」を「相手の心を開く挨拶」として紹介した。

そして第一に、自身がムスリムである立場から、生活に深く根ざすイスラームの信仰について説明した。まず「偶像崇拜」を取りあげ、形ある像を拝むだけでなく、神を超えて大切にすることがあってはいけない（お金、権力、自分自身、恋人、家族など）、独裁者のように自分を神のような存在と自負することも、本来大きな罪とされる、と説明した。

また、日本人は「苦しい時の神頼み」をするが、ムスリムは人生の良いことも悪いこともアッラーがもたらしたものである、と考える、そのため日本人のような「自己責任」的考え方で自分を追いつめることはあまりしない、と述べた。また自爆テロについて、本来命は神から与えられたものであり、自らそれを捨てることや他人のそれを奪うことはイスラームで最も重い罪とされる、と説明した。

一方イスラームで大切にされることは、実は日本人の道徳とよく似ていて、神はもちろん、親や周りの人にも感謝すること、忍耐、謙虚、弱者への思いやりであると紹介した。

第二に、イスラーム世界の女性たちを取りあげ、イスラームは本来女性を大切にする教えであり、女性の服装は「黒一色」ばかりでなく、最近「イスラーム・ファッション」に注目が集まっている（ユニクロでも販売）ことが紹介された。「虐げられている」イメージと違い、生き生きと生きている女性も多く、女性たちにとって大事なものは「かわいらしさ」や「愛嬌」ではなく「威厳」「尊厳」で、自分を大切にすることである、と説明した。例としてインドネシアでヒジャブのインターネット販売会社を立ちあげた若い女性社長のインタビューを流し、学生たちは実際に現代のイスラーム世界の女性たちの衣装を試着体験した。

第三に、イスラームにおける食物の決まり事「ハラール」が取りあげられた。実は明治維新前の日本にも、肉を「不浄」として食べない時代があったと紹介された。ハラール食品の例として、ハラールマークのついたラーメン、カレー、味噌



授業をする河田理事

汁などを挙げ、学生たちに実際商品を見てもらった。また異文化体験として、サウジ産ナツメヤシやイラン産ピスタチオ、オマーン産ザータル（野生のタイム）のお茶を飲食してもらい、乾燥地文化を五感で楽しむ機会も設けた。

最後に、異文化共生について、河田理事は「違いを認める」ことが重要であると述べた。日本人はよく相手に合わせようとするが、異なる文化をもつ人たちと同じになる必要はない、お互い相手の宗教に敬意をはらう気持ちがあれば十分であるとし、実際には日本人同士でもちょっとした違いがいじめの対象になったり、移民を基本にした国でさえ、不安をあおられ異質性を排除する方向に向ったりするが、それでも努力して違いを認め合わなければ平和は訪れない、ということを強調した。クルアーンの一節に「神は人間をそれぞれ違うものにおつくりになった。それは人びとがお互い知り合うようにさせるためである」とあることを紹介し、いま置かれている状況でうまくいかなくても、世界に出れば自分に合う場所があるかもしれない、いろいろな違いのある世界に目を向けてほしい、と学生たちにメッセージを送った。

講演会終了後、学生たちは河田理事に、イスラームの入信や結婚式について質問を投げかけ、アラビア料理のランチを楽しんだ（提供：アラビア料理店「アルアイン」）。

東京ジャーミィ見学では、学生たちはベールのかぶり方などにとまどいながらも、礼拝の様子を熱心に見て、多様な人びととの挨拶も実践していた。後に届いた感想のなかでも、「実際にスカーフを巻いてみて、いつもより物の見える範囲は狭くなっているように感じたけれど、その分自分の見ている物をより深く見られるようになったり、横があまり見えないので、自分の意志や心境をもっと感じることができました」「違うからこそコミュニケーションがとれる人間になりたい」「イスラーム教と日本文化の近さを感じました」「人種がちがったとしても、宗教がちがったとしても人は人であり、大切な存在なのだと思いました」との考えが述べられていた。

学生たちが、社会に出る前により広い視野を養うため、当財団はこのような出張授業を引き続き実施していきたいと考えている。

（藤本悠子）

講師を派遣します！ —出張授業の募集について—

当財団では「沙漠文化の諒解」の一步として、出張授業事業を行っております。現在下記のような内容で講師の派遣が可能です。詳細・ご希望の場合は当財団事務局までご連絡ください。

渡邊 三津子 (わたなべ みつこ)

奈良女子大学共生科学研究センター 研究支援推進員

◇授業内容：中央アジアにおける農業開発と環境問題／中央アジアにおける農業開発と社会変容／Google Earthを使って宇宙から沙漠を見てみよう！

◇ひとこと：中央アジアの人々の暮らしや環境は、近年の農業開発に伴って、どのように変化してきたのでしょうか？衛星データや写真を使って、沙漠の自然や暮らしやその変化をのぞいてみましょう。



石山 俊 (いしやま しゅん)

総合地球環境学研究所研究員

◇授業内容：アフリカ乾燥地(サハラ・オアシス、サーヘル・スーダン帯)の暮らしと文化
◇ひとこと：沙漠や乾燥地の暮らしと知恵を知ってみませんか？



縄田 浩志 (なわた ひろし)

秋田大学大学院国際資源学研究科教授

◇授業内容：「沙漠を生き抜く人間・動物・植物の知恵」「稀少な資源を分かち合う：イスラーム文化に学ぶ」など
◇ひとこと：沙漠は利用できる水や資源が少なく、生き物の種類や数も多くはありません。年によって降る雨の量も異なるので、環境も大きく変動します。しかし、人々はその中でも安定した生活を続ける努力をしてきました。そこにはいったいどんな知恵があるのでしょうか。沙漠を生き抜く一人ひとりの姿を紹介しながら、沙漠の生活と私たちのこれからについて考えてみたいと思います。



児玉 香菜子 (こだま かなこ)

千葉大学文学部日本・ユーラシア文化コース 准教授

◇授業内容：①モンゴル高原にくらすモンゴル民族の生業と文化
②「緑化思想」の解体：中国内モンゴルにおける植林ボランティア

◇ひとこと：モンゴルの暮らしと文化や、植林をめぐる文化の違いについて、写真などをつかいながら、解説します。



原 隆一 (はら りゅういち)

大東文化大学国際関係学部 教授

◇授業内容：オアシスのカナート村における水利用とひとびとの暮らし
◇ひとこと：イラン・オアシス村にある1本のカナート水。この水をうまく利用することから村の生活のすべてがはじまるのです

河田 尚子 (かわだ なおこ)

世界宗教者平和会議日本支部女性部会事務局長

◇授業内容：イスラームの生活文化
◇ひとこと：イスラームってどんな宗教？テロリストの宗教じゃないの？豚肉をたべないってほんとう？イスラームについて疑問におもっていることをどんどんきいてください。

古澤 文(ふるさわ ふみ)

片倉もとこ記念沙漠文化財団 研究員

◇授業内容：オアシスにおけるひとびとの暮らしと文化
◇ひとこと：シルクロードのオアシスってどんな場所？ひとびとはどんな暮らしをしているの？写真や映像、モノを通じて伝えます。

郡司 みさお (ぐんじ みさお)

早稲田大学国際情報通信研究センター中東湾岸プロジェクト招聘研究員、建築士

◇授業内容：知られざる ベールの下の女性の素顔
◇ひとこと：サウジアラビア、中東の女性って？9年間中東に住み特別な許可を得て、本来は撮影不可の世界を取材。貴重な写真と共に生の情報を伝えます。



片倉もとこ記念沙漠文化財団 2017 年 第 2 回助成事業（一般活動）募集のお知らせ

本財団の目的は「沙漠文化を大切にし(1)「沙漠そのもののうつくしさをひきだす(2) ことにより、沙漠文化の諒解(3) に寄与することです。この目的に沿った活動を広く募集します。

(1 片倉もとこ (2013)『旅だちの記』中央公論新社 p.183 参照のこと。

(2 同上 p.182 参照のこと。

(3 片倉もとこ (2007)「多花性と共働性—日本人の異文化受容をめぐる」国際日本文化研究センター『日本研究』第 35 集 .p.21-22 片倉は、『人間一人ひとりの内なる世界、意味の世界』を構築していくには、今までの『学問』からは排除されがちだった直感とか感性といったものも動員したアプローチが必要となる。理で解するすなわち『理解』だけでは太刀打ちできない面がある。情や勘や感性で解く『情解』というべきものもあって、はじめて全体的な『諒解』をなすことができるのではないか。」と述べている。

「片倉もとこ記念沙漠文化財団 2017 年助成事業（一般活動）」公募要領

I. 助成の対象

1. 助成対象となる活動

- ・テーマ：当財団の目的に合致するもの
- ・個人もしくは団体が主体となる活動
(対象とならない活動)
- ・営利目的のもの
- ・政治的又は宗教的な宣伝意図を持つ活動や、反社会的活動

2. 応募資格・条件

- ・応募者の国籍、所属、居住地などによる制限はありません。
ただし、十分な日本語能力を有すること。

II. 助成の概要

1. 募集件数

当財団事業年度（2016 年 10 月 1 日～2017 年 9 月 30 日）内に、最大 3 件

2. 助成金額

最大 15 万円

※助成金の使途は、活動に必要な経費とし、団体運営・維持のための経費（備品費、給与等）などは対象となりません。

3. 助成対象期間

原則、助成金交付から 1 年間とします（実施後 1 か月以内に報告書を提出すること）。

但し、活動報告書の審査により、特に優れていると判断されるものに関しては、計 2 年を上限として継続・延長も可とします。その際には、別途ご連絡します。

4. 助成の義務等

- ・助成対象者は当財団に誓約書を提出し、終了後に活動の経過・結果・会計について報告していただきます。助成期間終了後、半年を過ぎて有効な報告書の提出が無い場合は活動が執行されなかったと判断し、助成金の全額返還を求めます。
- ・活動は公開を前提とします。
- ・本財団にて活動報告書を発行、財団 HP で公開するほか、講演会等当財団が主催するイベントでの活動報告を依頼することもあります。
- ・余った助成金は返還していただきます。

III. 選考方法・基準

1. 選考方法

当財団の選考委員会において厳正かつ公平な書類選考のうち、代表者への面接を経て、理事会にて決定します。書類選考は、事業年度内 3 回（11 月、3 月、7 月）を予定しています。書類採択後のスケジュールに関しては、代表者宛てにメールにて連絡いたします。

2. 採否の通知

「採否」の結果は、審査実施月の末日までに登録メールアドレスに通知します。

結果の理由に関するお問合せには応じかねますのでご了承下さい。

3. 選考基準

次の要件を勘案して選考します。

- ・当財団の事業目的と公募内容に沿った活動であること
- ・活動計画が具体的であること
- ・支出計画が合理的かつ適切であること

- ・活動が社会に開かれたものであること
- ・教育など様々な面において社会に波及効果を及ぼすことが期待できること

IV 申請の手続き

1. 申請

本財団 HP より申請様式をダウンロードし、必要事項を記入の上、E-mail にて事務局宛に送信してください。

受付期間：

(第 1 回) 終了。

(第 2 回) 2017 年 2 月 28 日 17 時必着。

* 今回の募集期間です。

(第 3 回) 2017 年 6 月 30 日 17 時 [予定]。

おって、申請書類受理の連絡をこちらからいたします。

1 週間以内に連絡が来ない場合は、事務局 (office@moko-f.com) までお問い合わせください。

2. 申請書送付時の注意

メールの件名は「【一般活動助成】団体名もしくは申請者名」としてください。

3. 個人情報の取り扱い

申請書にご記入いただいた個人情報は、選考及び選考結果の通知のために使用するもので、個人情報保護法および関連する法令・規範にもとづき、厳重に管理します。ご本人の同意がある場合または正当な理由がある場合を除き、第三者に開示または提供しません。

4. その他

・助成金を受けた者は、ポスター・チラシ・パンフレット・入場券・Web サイト等に、当財団から助成を受けた旨を明記してください。

・助成金は、原則として応募者自身が管理してください。すべての出費は会計報告時に領収書原本の添付が必要です。所属する機関に規定がある場合、それに準じて執行するものとします。ただし、受託管理費 (オーバーヘッド)

は配分しません。

・ヒアリング、当財団主催の講演会等イベントへの出席にかかる旅費が生じた場合は、活動費とは別に当財団が負担します。

* 申請書記入上の注意

(1) 申請は、当財団指定の申請書フォーマット(A 4 サイズ)を用い、必ず枠内に日本語でご記入下さい。

(2) 必要事項はすべて申請書の中に漏れなく記入し、必要書類以外の資料は添付しないで下さい。別紙参照などを用いた申請、申請書フォーマットやページ数の変更があった場合、原則として申請を受理しませんので、ご注意下さい。

(3) 全ページ 10.5 ポイント以上を使用してください。

(4) 活動対象者欄には、誰に向けた活動であるかを具体的に明記してください。(例：一般・大学生、小中学生など)

(5) お送りいただいた申請書は返却しませんのでご了承ください。



2016 年一般活動支援助成支援を受けて開催された東京外国語大学シリア研究会による写真展「平和、その日の為に一日本語を学ぶシリア学生写真展」の様子

<募集要項詳細および申請様式>

募集要項 : http://moko-f.com/wp/wp-content/uploads/ippan_youryo_2017.pdf

申請様式 : <http://moko-f.com/category/activity/>

<申請書送付先・お問い合わせ先>

〒 151-0063 渋谷区富ヶ谷 2-21-1-610 片倉もとこ記念沙漠文化財団 事務局宛

メールアドレス josei@moko-f.com

ゆとりぎ賞授賞式出席のため来日された、アルアフマディ氏一行と財団評議員、理事で駐日サウジアラビア大使館およびアラブ イスラーム学院を表敬訪問しました。

■ 駐日サウジアラビアサウジ大使館 11月2日

サウジアラビアから来日されたアルアフマディ氏のご友人でジャーナリストのアルカシャアミー氏とアルアフマディ氏ご子息のガッサン氏、ハヤーン氏の4名、そして当財団の片倉評議員会議長、郡司理事の計6名でサウジ大使館を表敬訪問しました。アハマッド・アルバラック特命全権大使閣下にアルアフマディ氏と片倉評議員会議長から今回の来日についてや当財団の活動内容、ゆとりぎ賞の説明などを行い、ご理解いただきました。

■ アラブ イスラーム学院 11月4日

11月3日のゆとりぎ賞授賞式後、アラブ イスラーム学院ナーセル・ムハンマド・アルオマイム学院長より、「ぜひ

ひ当学院にお越しください」との招待を受け、11月4日、アルアフマディ氏一行4名と片倉評議員会議長、河田理事の6名で表敬訪問しま

した。アラブコーヒーとナツメヤシをいただきながら、学院長、ビルキース研究員、日本ムスリム協会の理事でもある水谷周研究員を交えて歓談しました。またアラビア語のクラスを見学し、アラビア語を学ぶ学生たちとの交流や展示物の見学をしました。



アラブ イスラーム学院にある展示室



バラック大使（中央）とアルアフマディ氏ご一行



アラブ イスラーム学院のアラビア語クラスを見学

📅 活動報告

- 2016年7月28日
シンポジウム「サウジアラビア:エネルギー資源、文化、環境対応」を秋田大学大学院国際資源学研究所と共催
- 2016年11月2日
駐日サウジアラビア大使館を表敬訪問
- 2016年11月3日
片倉もとこ記念沙漠文化財団 第2回・3回ゆとりぎ賞授賞式を開催
- 2016年11月4日
アラブ イスラーム学院を表敬訪問
- 2016年11月11日
神奈川学園中学校にて出張授業「イスラーム教徒の生活文化」（講師：河田尚子理事）を開催

📝 編集後記

一般活動支援の募集、出張授業講師派遣など財団の活動も多岐にわたってまいりました。興味ご関心がありましたらお気軽にご連絡ください。

✉ 片倉もとこ記念沙漠文化財団事務局

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷 2-21-1-610 号室
TEL：03-6407-9873 FAX：03-6407-9090
Mail：office@moko-f.com Web：http://moko-f.com

片倉もとこ記念沙漠文化財団ニュースレター No.4
Motoko Katakura Foundation for Desert Culture News Letter

2017年2月1日発行

編集：情報発信委員会（渡邊三津子，古澤文，藤本悠子）
発行：片倉もとこ記念沙漠文化財団